

書燈

2023年 No. 57



図書館は どこへ行く

吉高神 明
経済経営学類

図書館は時代の変化に大きく影響されてきた。学術機関リポジトリ、デジタルアーカイブ、電子ブック/ジャーナル、ラーニングコモンズなど、近年図書館が提供するサービスの高度化・専門化には驚かされるばかりである。この流れが顕著になったのは、1990年代半ばのMicrosoft Windows95の登場によってパソコンが一般家庭に普及してからのように思われる。

図書館の歴史は古い。世界最古の図書館は、紀元前7世紀にアッシリア帝国のアッシュールバニパル王の王宮遺跡から発掘された粘土板の図書館であるとのことである。日本では、奈良時代(8世紀末)に石上宅嗣(いそのかみのやかつぐ)が私邸内につくった「芸亭(うんてい)」と称する書籍を一般公開したのが図書館の始まりであると考えられている。なお「公共図書館集計(2022年)」によれば、現在日本全国には3,305の公立図書館が存在しているとのことである。その意味では、図書館は我々人類にとって今日に至るまでの長い期間、知識と文化の主要な蓄積・提供手段となってきたのである。

図書館とは、図書館法第2条によれば「図書、記録、その他必要な資料を収集し、整理し、保存して、一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資することを目的とする施設」であるとのことである。近年では、「知識・文化の蓄積・提供」という本来の機能だけでなく、「地域における交流創出」

や「現代・地域課題解決支援」の拠点としての役割にも期待が高まっている。

このような図書館は、新型コロナウイルス感染拡大によって、大きな試練を受けることになった。2020年1月の新型コロナウイルス感染拡大以降、政府による度重なる緊急事態宣言によって、図書館への来館は3密対策の観点から大きく制限され、書架を眺めながら興味ある本を探すという楽しみも事実上不可能になってしまった。その結果、図書館に対しては、オンラインを中心とした「非来館」・「非接触」型サービスの拡充が短期間で求められるようになったのである。

振り返れば、図書館に対する逆風としては、新型コロナウイルス感染拡大以前より、若者の読書離れが指摘されてきた。全国大学生生活協同組合連合会の第58回「学生生活実態調査(2022年)」では、1日の読書時間を0分と回答した大学生が全体の46.4%を占めている。これは、Z世代にとって読書は「タイパが悪い」ということなのであろうか。

これからの図書館はどこに行くのか。第5期科学技術基本計画(2016～2020年)は、狩猟社会、農耕社会、工業社会、情報社会に次ぐ新たな社会として「Society 5.0」を提示し、サイバー空間(仮想空間)とフィジカル空間(現実空間)を高度に融合させた社会システムをデザインしている。IoT、ブロックチェーン、ビッグデータ、人工知能(AI)…。Society 5.0が想定する社会の中核的技術は、すでにわれわれの日常生活の一部となっている。図書館もこのようなSociety 5.0の中で書店、マスコミ、インターネット、AIなどと競合・連携しつつ、自らの在り方を模索し続けることになるであろう。

これからの図書館のゆくえが楽しみである。

山崎正和による「劇的な日本人」は、この論をタイトルにした著書の冒頭に収録されており、今回初出を確認してみると『新潮』[昭和]46年2月号とある。

この文章に最初に出会ったのは、高校の現代国語の教科書だった。その後、図書室/館で本を探して読み、大学生になってから古本屋で見つけて購入した。教科書では一部収録だった記憶があるが、定かではない。授業のことは全く覚えていないが、何度も読み返したのは覚えている。

日本の精神風土に本来劇的なものが欠けているか否かという問題提起は、私には実感が伴うものではなかった。しかし、論の中に据えられている作品や人物がとても魅力的に映った。その魅力をきっかけに私は色々なものを読み、観るようになり、その行動がこの本の影響であると感じてきた。

まずソポクレスの『オイディプス王』である。幸い厚い本ではない。読んで、確かに劇的だ、と思った。スフィンクスを倒し王となった自らを恃むオイディプスの傲然たる意思と、赤子の

時に捨てられ何も知らぬ本人には避けようもない境遇とが絡み合って、事態が破滅に向かって突き進んでいく迫力は凄まじい。山崎は「西洋の正統的なドラマは、必ず人間のアイデンティティーと世界の可知性から出発し、そのうえでそれらの崩壊と不可知性の発見に向かって進行する。そして、最初に前提されているのがいわば世界の必然性への確信であるから、当然その崩壊の過程も、いわゆる『劇的な必然性』のかたちをとらなければならない。」と書くが、納得である。

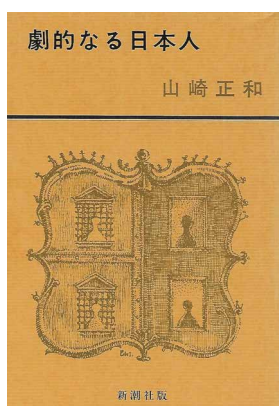
これに対置される日本のもので私の印象に残ったのが、平知盛と世阿弥であった。

大学は法学部に進んだが、学生寮の先輩に誘われて国文学のサークルに入った。部会に分かれて活動しており、私は中世の部会を選んだ。ここで新古今和歌集、平家物語、閑吟集、世阿弥の能楽論などを読んだ。世阿弥は私が頼んで輪読の対象に選んでもらった。2年生の半ばか

らは法律のサークルが忙しくなって離れたが、今思うとここでの活動は人生を豊かにするという意味でありがたかった。古文への抵抗感も激減した。

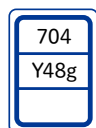
平家物語は、琵琶法師の語りがもとなだけあって、改めて読むと比較的読みやすかった。平知盛は壇ノ浦で、安德帝などの入水の後、「見るべき程の事をば見つ。」と言って海へ入り自害する。山崎は、木下順二の、日本文

学の伝統のなかでただひとり真に「劇的」な人間は平家物語の平知盛であるという言葉を引き出した上で、彼を、如何ともしがたい運命を十分に知った上で、「それゆえにこそ」入念に行動して果敢に死ぬことのできる人物であるとしている。後に木下順二の『子午線の祀り』が上演されると聞き観に行った。古代ギリシア劇のコロスの系譜であろう群読があり、主役は平知盛であった。ただ不思議に目に残るのは、知盛と対照的な観世栄夫演じる平宗盛が、くるくると円を描き舞いながら親子で流される壇ノ浦の情景である。その円が能舞台の大きさだと思ったのを妙に覚えている。



劇的な日本人

山崎正和著
新潮社, 1971.7



資料ID: 123061845

世阿弥の「風姿花伝」は読み進めるのにひどく苦勞した。テキストとして新潮日本古典集成の『世阿弥芸術論集』を使っていた。後ろの方に載っている他の伝書も読んでみたが、能を知らないので当然わからない。少しでも有名な「秘すれば花」が何か知りたかった。「花と面白きと珍しきと、これ三つは同じ心なり。」「住するところなきを、まづ花と知るべし。」「ただ花は、見る人の心に珍しきが花なり。」などへ当時引いた線が残っている。観客という他者の中に効果を生じさせるための研鑽を、初心から最期まで絶えず変化しつつ続けること、それが大事らしいとうっすら感じていたように思う。

大学院の頃から能を観に行くようになった。時に生の世界が一転して死者や人ならざるものが同じ演者に立ち現れる。正直謡本なしにはことばは不明だが、舞や謡の調べに浸ると何かが解されていくような気がしている。

「福島大学オープンアクセス方針」について

福島大学は、研究成果を広く学内外に公開することにより、学術研究のさらなる発展に寄与するとともに、その成果を社会に還元することを目的として、令和5年（2023年）年1月16日に「福島大学オープンアクセス方針」を策定しました。

「オープンアクセス」とは学術論文等がインターネット上で公開され、誰でも無料で利用できる状態にすることです。

方針では、学術雑誌等に掲載された本学教員の研究成果を、「福島大学学術機関リポジトリ」又は著者が選択するその他の方法によって広く公開することを定めています。

研究成果のオープンアクセス化は、著者にとっても以下のようなメリットがあります。

- ・ 世界中の人に研究成果を読んでもらう機会が得られる。
- ・ 研究成果が引用される可能性が高まる。
- ・ 異なる分野の研究成果に触れる機会が増え、研究の幅が広がる。
- ・ 自分自身の研究成果をいつでも確認することができる。

研究成果は、「福島大学機関リポジトリへの登録」「オープンアクセスジャーナルへの掲載」「オープンアクセスオプション選択による出版社ウェブサイトでの掲載」「外部機関が設置する機関リポジトリでの公開」のいずれかの方法により公開します。

なお、研究成果の提供にあたっては、著者において、出版社・学協会等の許諾条件を確認する必要があります。リポジトリ登録が許諾される版については、論文投稿時に取り交わす著作権譲渡書（Copyright Transfer Form）に明記されるのが一般的です。

その他、不明な点がありましたら、担当窓口までお問い合わせください。

【福島大学オープンアクセス方針関連 URL: <https://ir.lib.fukushima-u.ac.jp/ir-info/OA/>】



【オープンアクセス方針及び実施要領に関する問い合わせ先】
附属図書館 情報管理係（リポジトリ担当）
irinfo@lib.fukushima-u.ac.jp / 024-548-8085（内線 2604）

福島大学校友会からのご支援による環境整備について

1. 図書資料充実への支援拡大

「学生教育支援環境等整備事業」として、令和3年度より電子資料や参考図書の購入をご支援いただき、令和4年度には福島民友新聞のWeb縮刷版「みんゆうデジタルアーカイブ」を導入しています。今年度はさらに対象を広げて、震災関連資料及び学習用図書の整備を図っています。これらの資料は、電子・冊子の形態を問わず、全てOPAC（蔵書検索システム）から検索することができます。ぜひご利用ください。



2. 飲食エリアのリニューアル

「人脈構築事業」により、10月末に本館1F飲食エリアをリニューアルしました。

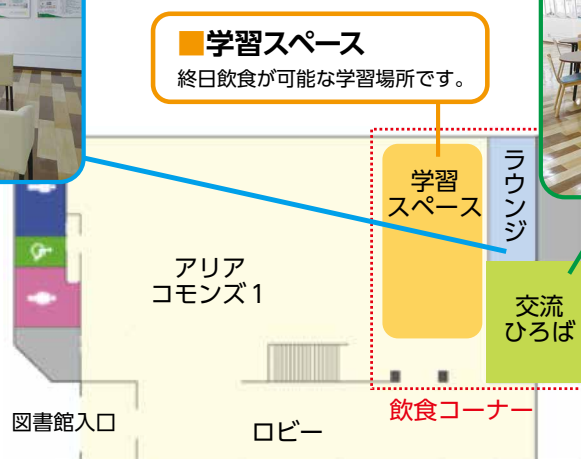
エリア内を「ラウンジ」「交流ひろば」「学習スペース」の3つに分け、目的に合わせてご利用いただけます。学習場所としてはもちろんのこと、休憩やグループでの交流の場としてもご利用ください。

なお、このエリアでは終日飲食が可能ですが、音が出るもの、においの強いもの、汁ものなどをご遠慮ください。多くの方に心地よくご利用いただけるようご協力をお願いします。



■ラウンジ

学習や研究の合間に一息つきたいときなど、休憩場所としてご利用ください。また、壁には、大学からの情報発信等を定期的に掲示する予定ですので、こちらもぜひご覧ください。学内の研究活動など、新しい発見があるかもしれません。



■交流ひろば

学生や教職員、そして同窓生・保護者のみなさまが、学類などを越えて集い、交流できるスペースとして、新たに設置しました。空いていれば、学習場所としても利用可能です。

今回の環境整備は、令和3年度の施設有効活用WGの報告を基に進めているもので、ラーニング・コモンズ（エリアコモンズ）を中心とした本学の学習・研究の活性化を目指しています。

活性化の一環として、同じフロア内のエリアコモンズ1でのイベント開催なども可能ですので、ご希望がありましたら、2Fカウンターか情報サービス係までお気軽にお尋ねください。

たくさんのご利用をお待ちしております。

福島大学初のネーミングライツがスタート!

福島大学附属図書館は、2023年4月から5年間、福島日産自動車株式会社とのネーミングライツ・パートナー契約を締結し、附属図書館の愛称を「フクニチャージ図書館」としています。ネーミングライツ制度は本学として初の取り組みであり、大学施設の有効利用を通じて教育研究環境の向上を図ることを目的として2022年12月に導入しました。名前の由来になっている「フクニチャージ」とは、福島日産の親しみを込めた略称「フクニチ」と、電気を充電する時の言葉「チャージ」の2つの言葉を掛け合わせて、新しく誕生した言葉です。そして、福島日産の電気自動車事業の総称としても、提供する商品やサービスを通して、地域に元気をチャージするという意味も込められています。福島地域ではフクニチャージのCM放映を行っており、福島県出身の俳優、板橋駿谷さんを起用しています。かなり斬新なCMで、一見なんのCMだろう?と思わせるところが、福島日産さんとしての広報戦略とのこと。

また、愛称は館内の各フロア・ルームにもつけられ、1階から3階にあるラーニングコモンズを「アリアコモンズ」、2階開架閲覧室を「フクニチリーディングルーム」、3階セミナールーム及びスタディールームをそれぞれ「リーフセミナールーム」「サクラスタディールーム」としています。「フクニチャージ」の愛称とともに、学生さんをはじめ多くの皆さんに親しんでいただければと思います。

なお、この事業契約によって当館では図書利用の利便性を向上させるために、図書自動貸出返却装置の更新などを予定しています。



(フクニチャージ図書館の玄関サイン)

図書館システムリプレイス報告

図書館システムの更新に伴い、2023年8月28日より、以下のとおり新しい機能等が追加されました。画面等の詳細は、ホームページの9月1日付のお知らせもご覧ください。

1. 蔵書検索：OPAC

【主な変更点】

- ①検索結果の一覧にも、所蔵情報が表示されるようになりました。
- ②所蔵情報の「配架場所」から配架マップにリンクし、資料がおいてある場所を確認できるようになりました。
- ③レコメンドスタンプとして、該当図書に「新着情報」・「人気図書」・「指定図書」(シラバス掲載参考図書、校友会寄贈図書)が表示されるようになりました。
- ④MyLibraryにログインした状態でOPACを使用すると、自分で本にタグやブックマークを付けることができ、また、過去に貸出した本には「借りたことあり」のスタンプが表示されます。
- ⑤検索結果の画面右側に、入力した検索語からWikipediaの情報や関連語を表示しています。言葉の意味を確認したり、関連するキーワードで再検索することが可能です。

2. 文献複写・相互貸借申込

文献情報が自動で入力される機能を追加しました。

3. 学術機関リポジトリ

【主な変更点】

- ①本学で刊行されている紀要等を「福島大学刊行物」としてまとめ、刊行物や巻号ごとに一覧できるようにしました。
- ②詳細画面の著者情報にNRID(科研費研究者番号)表示があれば、そこからKAKEN研究者ページにリンクできるようになりました。なお、NRIDは、本学に所属している研究者について表示しています。

4. 横断検索システム

福島県立図書館の横断検索システムに統合し、県内の大学図書館だけでなく、公共図書館も含めてまとめて検索ができるようになりました。

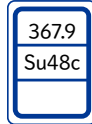
また、福島県立図書館や福島県立医科大学図書館にある資料で貸出が可能なものは、ふくふくネットで取り寄せができますので、こちらもぜひご利用ください。

学内教員著作寄贈図書



「地方」と性的マイノリティ 東北6県のインタビューから

杉浦郁子, 前川直哉著
青弓社, 2022.11



資料ID: 122032692

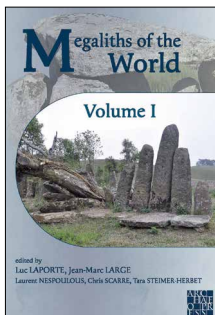
性的マイノリティ団体の活動について、「東北は遅れている」と語られがちです。本当にそうでしょうか。意外と知られていませんが、東北にはたくさんの性的マイノリティ団体があり、地域に根差した活動を展開しています。2022年には東北6県全てで性の多様性尊重を訴えるレイン

ボーパレードが開催されました。

本書は東北6県で活動する19団体・23名の方へのインタビューをもとに、「地方」と性的マイノリティについて考えた本です。このテーマでは日本初の研究書となります。「地方」も「性的マイノリティ」も、イメージだけで語られがちという点では共通しています。

福島県でもいくつかの自治体で、パートナーシップ認定制度が導入されるようになりました。こうした社会変革の背景には、地域で活動する人びとの地道な努力があったことも、本書をお読み頂ければ理解してもらえそうです。このテーマに関心のある多くの方に読んでもらいたいと考えています。

(教育推進機構／前川 直哉)



Megaliths of the world

edited by Luc Laporte ... [et al.]

Archaeopress Publishing, [2022]



資料ID: 122026838



資料ID: 122026841

本書は、2019年9月にフランス・ヴァンデ県立歴史博物館を会場に開催された同名の国際会議の内容が2分冊で書籍化されたものである。Megalith(メガリス)とは、世界各地にみられる巨石を用いた遺跡のことで、代表的な例にイギリスのストーン・ヘンジやイースター島のモアイ像がある。

私は、会議で「先史・原史時代における日本列島の巨石遺跡」と題する英語発表を行い、本書にもそれを英文化したものが掲載された。日本列島では巨石を用いた遺跡の印象は薄く、実際に多くはないが、それは地震が多発する日本列島の環境を反映したものと考えられ、会議でそのことを説明すると多くの参加者が理解してくれた。

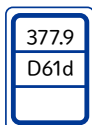
会議と本書で取り上げられた巨石遺跡はほぼ全世界におよんでおり、私自身も世界にこれほど多くのさまざまな巨石文化が存在したことに驚き、刺激を受けるとともに、非常に勉強になった。本書は1400ページを超える大著でありながら、PDF版は出版社のHPから無料でダウンロードできる。世界の巨石遺跡を調べ、研究するうえで不可欠の論文集になるだろう。

(行政政策学類／菊地 芳朗)



傳達給台灣的朋友們 福島の學生的日常生活 = 福島の学生から台湾の友人たちへ 私たちの福島生活31のストーリー

飯館までい文化事業団,
2022.3



資料ID: 122002178

ゼミの学生たちと一緒に書いたのは、福島の学生たちの日常生活です。恋愛からアルバイト事情、被災体験から、復興支援活動まで。学生たちの「日常」は、ゼミ教員が驚くほど面白いんです。

恋愛といっても、只見の学生が中学時代、彼女に会いに

片道1時間かけて会いに行った話や、アルバイトといっても、新聞勧誘で訪ねたうちのおじいちゃんに、「福島大学？ そりゃ、東大だ！」と言われたり。宮城の山の中のばあちゃんちに避難していて、薪があり水があり「普段通り」の生活を送っていたという話から、原発事故による避難→福島大学で考えたことまで。飯館村でのゼミ活動も。学生たちの「日常生活」は、想像を超えて幅広く、多様です。

台湾の言葉と日本語の2か国語で書かれたこの本を読む人には、そんな彼らの「日常生活」のなかに、少しでも、「自分と同じだな」と思ってもらいたい…この本を書いた動機です。福島で暮らす私たちに「共感」を持ってもらうことが、いわゆる風評被害対策でも、被災地の復興やエネルギーの未来を一緒に考えるためにも、必要とされる共通の基盤になると思うからです。

(行政政策学類／大黒 太郎)

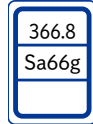
著作資料のご寄贈のお願い

先生方からご寄贈いただいた資料は、新館2Fの「福島大学教員著作物コーナー」等に配架され、本学の貴重な資料として永く保存し、広く学生や地域の方にもご利用いただいております。著作物のご寄贈について、ご協力をお願いいたします。



外国人労働者と 支援システム 日本・韓国・台湾

佐野孝治, 坂本恵,
村上雄一編著
八朔社, 2023.3



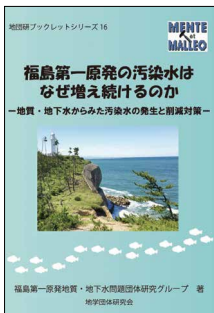
資料ID: 122049433

本書は、佐野孝治、坂本恵、村上雄一の3名による国際比較研究の成果の一部です。欧米諸国に比べ、共通の社会経済システムと課題を持つ日本・韓国・台湾について、外国人労働者受入れの現状と課題を明らかにし、制度・政策・

支援システムの比較を踏まえて、多文化共生を基本に置いた持続可能な外国人労働者受入れシステムについて論じています。

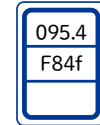
現在、アジアでは経済成長と少子高齢化が進む中で、すでに「外国人労働者争奪戦時代」に突入していますが、日本は、経済停滞等で、「働く国としての魅力」を急激に低下させています。そのため、経済・社会発展と外国人労働者の人権を両立させていくための、持続可能な外国人労働者受入れシステムを構築していくことは緊急の課題だと思います。本書が、多文化共生に関心を持つ多くの読者の目に触れ、何らかのヒントになれば幸いです。

(経済経営学類/佐野 孝治)



福島第一原発の汚染水は なぜ増え続けるのか 地質・地下水からみた汚染 水の発生と削減対策

(地団研ブックレットシリーズ; 16)
福島第一原発地質・
地下水問題団体研究グループ著
地学団体研究会, 2022.7



資料ID: 122018906

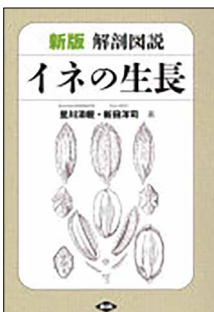
私が代表を務める「福島第一原発地質・地下水問題団体研究グループ」(略称: 原発団研)は、2015年2月に地学団体研究会(略称: 地団研)の有志が集まって発足し、福島第一原発の汚染水問題について地質や地下水の専門的立場から研究を行ってきました。2021年7月にその成果を地団研専報61『福島第一原子力発電所の地質・地下水問題

ー原発事故後10年の現状と課題ー』という論文集で公表しました。

私たちが提案した抜本的な汚染水対策は各方面から注目され、読者や市民団体の方々から、論文集の内容をわかりやすく解説した本を出してほしいとの要望が寄せられました。そこで、私たち原発団研では、福島第一原発の汚染水はなぜ増え続けるのか、どうしたら汚染水の発生を減らすことができるのかを、地質や地下水の視点からわかりやすく解説した本書を作成しました。これまでに、全国で1万冊以上も本書を普及することができました。

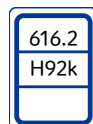
汚染水問題を根本的に解決するためには、処理水の海洋放出ではなく、汚染水の発生を早急かつ抜本的に減らすことが必要です。本書が福島第一原発汚染水問題の根本的な解決の一助になれば幸いです。

(共生システム理工学類/柴崎 直明)



新版 解剖図説 イネの生長

星川清親, 新田洋司著
農山漁村文化協会,
2023.3



資料ID: 122049406

本書は、イネの体のようすを、細胞レベルから、穂・茎・根・葉の器官レベル、そして水田の群落レベルまでつまびらかにした専門書です。著者のひとり星川清親先生が、イネの形態や生態を明らかにし、1975年に初版を刊行されました。その後、1989年に英訳版(The Growing Rice Plant)

が刊行され、海外でも広く使い続けられました。イネ研究者のバイブルであり、大学や試験研究機関での実験・研究には、つねに傍らに置かれる必携の著です。

初版からおよそ半世紀、初版の人気は衰えず、しかし新見聞や内容を改めるなど加筆・修正する必要がでてきました。1996年に永逝された星川先生にかわり、ちょうど学生時代にご指導を受けた新田が、力不足ですがその任にあたることとなりました。

上梓した新版では、初版刊行後の半世紀の間、新たに解明された知見や学説を加えました。また、新田が福島大学に着任して5年間で、得られた成果や電子顕微鏡写真も多分に盛り込みました。専門書ですが図や写真が多く、一般の方でもわかりやすい一冊です。

(食農学類/新田 洋司)

カウンターの内側から

共生システム理工学研究科1年 大槻 響

皆さんは図書館の存在意義を考えたことはありますか？存在意義は各個人によって変わるかもしれませんが、辞書には「図書・記録その他の資料を収集・整理・保管し、必要とする人の利用に供する施設」（『図書館』. 新村出. 『広辞苑』第7版. 岩波書店, 2018, p. 2099.）と書かれています。つまり、「先人の知恵」を学ぶための「本」を提供する場であると私は解釈します。

私がカウンター業務に携わってから、約3年半になりますが、利用者の立場では気づけなかったことが多くあります。第1に「豊富な蔵書数」です。皆さんが普段見ている開架の資料は約30万冊あるのに対して、書庫の資料は約70万冊あり、約2倍の資料が書庫に蔵書されています。第2に「図書館サービスの充実」です。ふくふくネットや相互貸借、購入リクエスト、オンライン・データベース等様々あり、数多くの情報が図書館を通して得られます。特に日々増える新聞や論文等のオンライン・データベースは検索窓を使用することにより、所望の資料を迅速に見つけ出すことができますので、とても便利です。



また、ラーニングコモンズなどグループ学習をする場やスタディールームなど個人で学習したい人向けの場所も充実しており、皆さんの学習スタイルに合わせた場を提供しています。

最後に、福島大学附属図書館では、冒頭で示した「先人の知恵」の他に「友人の知恵」を学ぶ機会を与えてくれます。そこには自分だけでは気づけなかった「学び」があるでしょう。

何か図書館についてわからないことがあれば、お気軽にカウンターにお尋ねください。情報収集のお手伝いをします。皆さんの生活の場に、図書館はいかがでしょうか。

福島大学附属図書館報

書 燈

発行日 / 2024年3月

発行元 / 福島大学附属図書館
〒960-1293 福島県福島市金谷川1番地
tel.024-548-8087

<https://www.lib.fukushima-u.ac.jp/>



福島大学附属図書館報「書燈」第57号 目次

● 巻頭言 「図書館はどこへ行く」	吉高神 明	1
● 思い出の一冊	鈴木 めぐみ	2
● 福島大学オープンアクセス方針について	附属図書館	3
● 福島大学校友会からのご支援による環境整備について	附属図書館	4
● ネーミングライツ契約について	附属図書館	5
● 図書館システムリプレイス報告	附属図書館	5
● 学内教員著作寄贈図書を紹介		
『「地方」と性的マイノリティ：東北6県のインタビューから』	前川 直哉	6
『Megaliths of the world』	菊地 芳朗	6
『傳達給台灣的朋友們：福島的學生的日常生活』	大黒 太郎	6
『外国人労働者と支援システム：日本・韓国・台湾』	佐野 孝治	7
『福島第一原発の汚染水はなぜ増え続けるのか』	柴崎 直明	7
『解剖図説イネの生長』	新田 洋司	7
● カウンターの内側から	大槻 響	8

編集
後記

2023年度は、ネーミングライツ契約や校友会からのご支援により、館内に新たなサインが設置されたり什器類の入替があったりと、見た目にも変化がありました。今後も、ハード面・ソフト面共に、利用しやすい環境整備ができればと思います。